

取返し物語

岡本かの子

青空文庫

前がき

いつぞやだいぶ前に、比叡の山登りして阪本へ下り、琵琶湖の岸を彼方此方見めぐらうち、両願寺と言ったか長等寺と言ったか、一つの寺に『源兵衛の髑髏』なるものがあつて、説明者が殉教の因縁を語つた。話そのものが既に戯曲的であつたので劇にしたらと思ひ付いて、其後調べの序ついでに気を付けていると、伝説として所々に出ている。此のたび機会があつたのでまとめしてみた。伝説には三井寺はもつと敵かたきやく役になつてゐるが、さまでほと和げて置いた。

一たい歌舞伎劇の手法は、筋の運び方と台詞せりふのリズムに、原理性の表現主義を持つていて、ものに依つては非常に便利なものである。

滅ぼしてしまうのは惜しい。此の戯曲には可かなりそれを活用してみた。

時

文明十一年十一月（室町時代末期）

処

近江国琵琶湖東南岸

人

蓮如上人

浄土真宗の開祖親鸞聖人より八代目の法主にして、宗門中興の偉僧。

世に言う「御文章」の筆者。六十九歳。

竹原の幸子坊 上人常随の侍僧。

堅田の源右衛門 堅田ノ浦の漁師頭。六十二歳。多少武士の血をひいて居る。

同源兵衛 源右衛門の息子。二十三歳。

おさき 源右衛門妻。五十四歳。

おくみ 孤児の女中、もと良家の娘、源兵衛の許嫁。十八歳。

円命阿闍梨 三井寺の長老。

三井寺の法師稚児大勢。

その他、村の門徒男女大勢。

第一場

(山科街道追分近くの裏道。冬も近くで畑には何も無い。ところどころ大根の葉の青みが色彩を点じている。畦の雑木も葉が落ち尽し梢は竹藪と共に風に鳴っている。下手の背景は松並木と稲村の点綴でふち取られた山科街道。上手には新らしく掘られた空堀、築きがけの土堀、それを越して檜皮葺きの御影堂の棟が見える。新築の生々しい木肌は周りの景色から浮き出ている感じ。柱五十余木を費し、乱国にしては相당한構えの建築物の棟である。花道から舞台を通って御影堂の堀横に行きつく道は造営の材料を運ぶために新しく造つたもので、里道よりはやや広く、路面に人々の踏み乱らした足跡、車の轍の跡が狼藉としてゐる。使い残りの小材木や根太石も其の辺に積み重ねられている。遠景、渋谷越の山峰は日暮れの逆光線に黝んでいる。)

開幕。土地の信徒で工事手伝いの男女の一群上手よりどやどやと出て来て舞台の下手へ入る。中の三四人、序に運んで来た材木切れをそこに置き、身体の埃を打ち叩き、着物をかい繕ろいなどしつつ作業を仕舞つたしこなし。

信徒一『や、これでまあ御影堂の仕事もすっかり終つた。明日からは土堀の方の手が足ら

んちゆうから、あちらの手伝いに廻つたるかい』

信徒二『そやそや。何でも手の足らん箇所を見付け次第、そこへかぶりついて是が非でも此この月末の親鸞さま御正忌会のおたいや夜までには美んごと拵こしらえ上げにや、わてらの男が立たん』

信徒三『わてらの男なぞどうでもええ。御門徒衆、一統の男さえ立てばええわい』

信徒二『そりやまあそうや。御門徒衆一統の男さえ立てばええ。わしもその中の一人やからな。だが、なんしい十年まえ大谷の御廟所を比叡山の大衆に焼き払われてから、大將株のお上人さまは加賀、越前と辺海の御苦勞。悪う言ええ田舎廻りや。それがようよう時節がめぐつて来て、都近くこの此の山科にお堂の再建。こりや門徒一同のずんと男が立つわけじゃ』

信徒四『お堂が斯こう立派に出来てみると、早く中身の親鸞さまの御影像もお迎え申し、据わるところに据わつて頂かんことにや、何となく落付きが悪い。仏造つて魂入れずと言うこともあるからなあ』

信徒一『そりやわいどもより、御先祖孝行のお上人さまの方がどのくらいそれを望んで居らりようか知れん。それで十年前に北国へお立退きの際、お預けなされた三井寺の方へ

此の間じゆうからさいさい掛合われなされたけれど、一向取戻しは埒明かんと言うことじゃ』

信徒二『そりや初耳じゃ。どうして返さんのじやろ。どだい、こつちやのもんやないか。

利息でも呉れと言うのか』

信徒一『ごまかいことは知らんが、何でもややこしい難題やそうな。それで御上人さまも亦、おひと苦勞じゃやそうな。然しそんなことをおれ達がかれこれ氣を揉んでも始まらんこつちや。ものは分け持ちや、おれ達は持分の御普請に精出すのが何より阿弥陀さまへの御奉公じゃ。おつとそう言うてる間に日が暮れて来た。さあ、もう往のう往のう、明日はまた朝早いぜ』

信徒二『御影像を返さんとはけしからん三井寺のやつじゃ。どないして返さんのや。あれはもともと……』

信徒みなみな『まあええ、われが心配することは無い。往のう往のう』

(一同下手へ入る。花道よりおくみ、風呂敷包を抱え宿入り姿で出て来る。屈托の様子。)

おくみ『ああ、焦れる、焦れる。これではわたしの年に一度の奉公休みも台無しだ。お上

人さまにお目にかかりに行けば、お上人さまはおいでなされず。源兵衛さまも同じこと。一日じゆう、あっちへ行ったりこっちへ行ったり。なんと言う験げんの悪い日だろう。わたしやもう草くたび臥れてしまった』

(材木のところへ来て、その一つに腰かけ、膝へ頬杖突いて吐息つきながら思わず御影堂の棟を顧る。はつとして合掌。)

おくみ『「忘れまいぞえあのことを」「忘れまいぞえあのことを」(此の言葉を言うとき念仏の句調、以後同じ) ああ、わたしとしたことが、また瞋しんい恚の焰ほむら炎に心を焼かれ勿もつた体いないお上人さまをお恨み申そうとしかけていた。「忘れまいぞえあのことを」「忘れまいぞえあのことを」お上人さまとて折せつ角出来た此の御堂に、そりや常住おいでなさり度たいのはあろうけれど、聴けばいろいろ御公事に就ついての御奔走、それを欠いてまでわたし一人の爲めにお待ちなさりよう筈はずもなし。こりやお留守なのが当り前だ。だが源兵衛さんはどうしても腹が癒えぬ。わたしが今日こそ年一日の暇を取って、訪たずなうとは兼かね々知らしてあるのに。家へ行けば母御ばかりがぼんやり。奉公前によく逢うたあの追分けの松の根方に佇たんで待つて見ても、それかと思うはまぼろしばかり。ほんの姿は遂に来もせず、——それとも若もしや源兵衛さんに心変りでも、——ひよつとして

若しそんなことになつていたら、わたしやどうしたらよからうかしらん。おや、またしてもわたしの取越苦労。「忘れまいぞえあのことを」「忘れまいぞえあのことを」何も時節因縁と諦めてしまえば、それで済むのだが。と言う口の下から、もう此の逢い度い心は、……ええ、も、いつそ、今日は、お上人さまにお目にかかるのはやめてしもうて、源兵衛さんに逢う一筋に骨を折つてみましよう。お上人さまはお師匠さんでも根は他人、源兵衛さんはわたしの夫。源兵衛さんに逢わずに往んでは、それこそ此の胸が焼け尽してしまふわ』

(おくみ、決心してすつくと立上る。いつの間にか蓮如上人弟子の竹原の幸子坊一人供につれ、上手奥より出て来て様子を見て居たが、おくみが立上る途端に上人は進み出て)

蓮如『おくみ、そりやわしより源兵衛に逢うて行くがよい。わしは汚ない年寄りじやものなあ』

(おくみ、びつくりして、それが蓮如上人だと判ると、がばと突き伏す)

おくみ『まあ、お上人さま。わたくしは恥しゆうて顔もあげられませぬ。お人の悪いお上人さま。立聴きなぞなされて』

蓮如『は、は、は、は、まあ、そう恥しがらんでもよい。恋も因縁ずく。勧めもせられん代りに障さまたげもせられん。ただ忘れてならぬのは六字の名みょうごう号ごうじゃぞよ』

(おくみ、起上つて合掌)

おくみ『お慈悲は身に染みて身体が浮くようでございます。然しかしその御名号ごなが唱となえられぬばかりに、一度お上人さまにお目にかかつてお教えを頂こうと存じましてお探し申して居りました』

蓮如『ふむ、それは気の毒とも何ともはや、さては信心退転でもいたしたか』

おくみ『退転どころではござりませぬ。父母に死なれたたった一人の孤児。お念仏は父母の遺身かたみでもあればまた、わたくしの浮世の身の守りでもござります。どうして唱えずに居られましょう。それに、わたくしが引取られました奉公先の御主人は、大の念仏嫌い、南無と言うても、もう眼くじら立て、舌打ちなされます。身を退こうにも行先は無し。

御主様に育ての恩はあり、さればとてご唱名は欠かしたくなし、義理と法に板挟みの揚あげ句げくが、御念仏を唱えとうてなりませぬ時には「忘れまいぞやあのことを」「忘れまいぞやあのことを」かように申して阿弥陀さまへの申訳、自分の心への誓いにして居ります。あのことを、と申しますのは勿論信心のございます。然しそう唱えながらも

斯ういう空言を申さねばならぬ身の因果、女の罪障、恐ろしゅう思われてなりませぬ。もうしお上人さま。こういう空言のようなものでも、お念仏の代りになりませうか。仏さまのお救いには洩れませぬか。どうぞそれを教えて下さりませ』

(上人、しきりに涙を払いながら)

蓮如『おお、念仏の代りになるとも、なるとも。おくみどの。仏は知見を以つて何事も、広く知^{しろうめ}食すことなれば、そなたの念仏代りの言葉をも、とくと事情をお汲み取りなされ、念仏に通用さして下さるはもとより、只今^{しやうじやうしゆ}正定聚の数に入り、極楽往生疑いなし。女人と言えども天^{あつぱ}晴れな御同行の一人じゃぞ』

おくみ『それでは「忘れまいぞやあのことを」でも大事ございませぬか』

蓮如『そなたに限つて大事な。安心して唱えやれ』

おくみ『やれ有難^{かたじ}や忝^{つら}けなや。此の上はどんな辛い奉公も、苦しい勤めも辛抱いたします。忘れまいぞやあのことを。忘れまいぞやあのことを。忘れまいぞやあのことを。

何遍でも唱えさして頂きます』

(合掌して蓮如を拝む)

蓮如(合掌して拝を受けながら)『しかしおくみどの。「忘れまいぞやあのことを、」で

も差支えない。差支えないが、「忘れまいぞ、」と自分の力で自分のところを警しむるところにまだ自力の執が残つておる。これは、「忘れられぬぞあのことを、」と申す方が弥陀の方より与え給う信心を現すのみか、本願を悦ぶ貌もあり、ずんと当流易行の道に適うことである。逆ものことにそう唱えしやつしやれ』

おくみ『「忘れられぬぞあのことを」でござりまするか。「忘れられぬぞあのことを」でござりまするか。なんじや知らぬけれど、わたくしどもには一そ尊いように感じられます。お上人さまの御証明を得たからには、もう安心いたしました。では、これを土産に勇んで御主家へ戻ります。では御機嫌よう。お上人さま』

蓮如『まあ待ちやれ、おくみ、そなた何ぞ、も一つ忘れたものはありはせんかの』

おくみ『はて、忘れたものとは』

蓮如『さあ忘れたものとは』

おくみ『何のことでございます』

蓮如『そなたに取つてあの世の往生は定まった。然し此の世でいつち慕わしいお人に逢わんで往んでも大事ないか』

おくみ『あれ、御慈悲の有難さに源兵衛さんのことは、いつの間にもやら忘れていた。だが

思い出してみると、こりやどうしても源兵衛さんに逢わなくては……お上人さまも罪なお方でいらせられます』(再び恥かし気な様子)

蓮如『源兵衛はやがて御堂へ来る手筈てはずで、此の道を来ることになっている。わしは僧侶のことじゃ。恋の手引きは出来ぬ。しかし、ひとり手に此処へ通つて来るものを強しいて知らさずに置く必要もあるまい。やがて来るわ。まあ、よいようにしなされ。わしはこれで訣わかれるとしよう』

おくみ『何から何まで御心くばり、有難うて涙がこぼれます』

蓮如『では、まめに暮しなさい』

(蓮如行きかける。供の竹原の幸子坊後より続く。蓮如、幸子坊の持った松明あかりに目を
つけ)

蓮如『これこれ幸子坊』

幸子坊『はい』

蓮如『今夜は月明り、松明は要るまい。その辺に捨てなさい。序に火打袋も』

幸子坊円『滅めつ相そな。空も大分曇つて参りました。闇に松明は離せませぬ』

蓮如『いや、月明りじゃ。蟻ありの穴も数えられるばかりの月明りじゃ。松明は要らぬと申す

に』

幸子坊『でも』

蓮如（おくみの方を目配せつつ）『幸子坊、師の命を背そむかるるか。えい、松明は捨ていと申すに』

幸子坊（漸く意味がのみ込めて）『は、は、は、は、成なるほど程月明りでござった。これは飛んだ失礼、では捨てますでござりまする』

（幸子坊、おくみの方へ松明と火打袋を投げやる。おくみ感謝の涙に暮れる）

幸子坊『さあ、これでようございます。（空を仰ぎながら）こりやとても明るくい月明り、お上人さま足元をお気を付け遊ばしませ』

蓮如『幸子坊が何のてんごうを申すことやら、……然し此の世の中は辛いところだ。おくみにはおくみの苦労、わしにはわしの苦労がある。三界無安、猶ゆうにょ如火宅かたく、ただ念仏のみ超世の術じゃ。さあ行こう』（涙を押える）

幸子坊『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』

蓮如『さあ参ろう』

（おくみ、後姿を見送り合掌、幕）

第二場

（舞台正面、源右衛門の住家。牡蠣殻かきがらを載せた板屋根、船虫の穴だらけの柱、潮風に
 佗わびてはいるが、此の辺の漁師の親方の家として普通の漁師の家よりはやや大型である。
 庭に汐錆しわざび松数本。その根方に網や魚籠びくが散らかっている。庭の上手の方にほんの仕
 切りしただけの垣があり、枯れ秋草がしどろもどろに乱れている。小さい朽木門を出
 た五六間先からは堅田の浦の浪打際になっている。引上げられた漁船の鱸とちが遠近にい
 くつか見える。

背景に浮見堂が見える。闇夜だが、時々雲の隙から月光が射すのでこれ等の景が見え
 る。座敷の正面に荒家に不似合いの立派な仏壇が見え、正座に蓮如上人を据え、源右
 衛門と妻のおさきが少し離れて遜へりくだつて相對して居る。蓮如上人の弟子竹原の幸子坊は
 椽えんに腰掛けてゐる。）

源右衛門 『夜更よふけといい斯かかる荒家へ、お上人さま直々のお運び、源右衛門冥みょう加がの至り

に存じます』

蓮如『何の、何の、わしじやとてそう勿^{もつたい}体振つてばかりは居らぬ。次第によっては何処^{どこ}へでもいつ何どきでも出向きますわい。これがまた当流易行の御趣旨でもあるからのう』

源右衛門『恐れ入りました。御用の筋は』

蓮如『源右衛門。そなたは開山聖人さまの御影像に就いて何か噂を聞き込みはせぬか』

源右衛門『そのことでございます。只今もばばと話して齒齧みをして居ったところでございます。三井寺方の申条によれば、門徒宗の方に於^{おい}て開山聖人さまの御影像を取戻し度^たくば、生首二つ持参いたせ。それと引換えに渡してやろうと、かような返事との噂を聞きました。お上人さま、そりや本當でござりまするか』

蓮如『すでに存じておる以上隠し立てもなるまい。三井寺方の返事は全くその通りじや』

源右衛門『まさかと思つて聴き居りましたに、では本當でござりまするか。如何に乱れた世の中とは言いながら、引換えの料^{りょう}に人の生首。こりや無理難題を言いかけて御影像を

返さぬつもりとしか受取れませぬ』

おさき『出家ともあるものが、人の生首を所望とは、悪魔の所為としか思われませぬ』

蓮如『これには何か仔細のあることであろう。それに就いて源右衛門、そちに頼みがある

が是非聴いては呉れまいか』

源右衛門『数ならぬ御同行の端くれの私奴^めへ、お上人さま直々のお頼み、なんで否応を申しましょう。……………然しお情深いお上人さまのお口からこの御註文は、ちと仰^{おっ}しやり憎くはござりませぬか。代りにこの私奴から申上げて見ましようか』

蓮如『ほほう。何と推察せられたか、まあ、言うて見やれ』

源右衛門（あたりを見廻し、少し乗出し、小声になつて）『お上人さま、そのお頼みとは、三井寺へ引換えの料の生首二つ、この私奴^{とどの}に調^とえて欲しいと仰しやるのでございませう』

蓮如（驚いて手をさし延べ）『源右衛門。必ず早合点をしてはならぬぞ。わしは生首を調達しようとするような若^もしそういう不心得ものも此のあたりにあらば、そちに留めて呉れいと、留め役を言い付けに来たのだ。滅相もない』

源右衛門（妙な顔して）『なに。留め役でござりますると』

おさき『開山聖人さま御正忌会^{ごしやうき}のお夜^{たいや}も近々。御影堂は立派にお出来申したのに、お中身の開山聖人さまのあの御影像が無くて御報恩講が勤まりましようか。お上人さま始め御門徒衆御一同、数ならぬ私どもまで他宗に対してどうして顔が立ちましようか』

蓮如『名譽、不名譽は言つてはいられぬ。人の命が大事じや。憐れみ深い開山聖人さまが、それ程までして取戻せとも仰せおほあるまい。御影像取戻しに就いてはまた折れ合う時節もあろう。此の際、三井寺方の申条に対ししんい瞋恚を抱き、喧嘩、強訴、仕返し、その他何によらず殺伐なる振舞いを企つるものあらば、屹度きつとそなたから留めて貰い度のじや。頼んだぞ源右衛門』

源右衛門『じやと申してあまりな無法の言いがかり』

蓮如『年甲斐もない。そちから先に何事じや。この頼み聴かざきつと破門じやぞ』

源右衛門『ええ?……………是非もない。仰せかしこま畏りましてござります』

蓮如『おさき、そなたも心添えして下され』

おさき『は、は。はい』

蓮如『いや、思わずきつい言葉を放つて、さぞ聞き辛くもあつたであらう。許して呉りやれ。何事も思うに足らぬは此の世の常。お互いにお名号に慰められつつと兎も角かくも、生きて行く手段が肝要じや』

源右衛門、おさき（涙を流しながら）『有難うございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』

蓮如『とこう言ううち、夜半も過ぎた。どれもう一軒訪ぬるところがある。暇いとまとしよう』
源右衛門『もうお帰りでござりまするか』

(おさき、竹原の幸子坊の手に松明の無いのを見て)

おさき『幸子坊さん、松明は?』

幸子坊(手を開いて見て)『えつ、松明? その松明は』(思わず蓮如の顔を見る)

蓮如『何の行き慣れた西近江街道、杖、松明の助けは要らぬわ……………それに就いて思い出した。こちらの息子の源兵衛はな、門徒若衆達の寄合いの帰りに今宵は山科に来てゐる筈、戻りは遅うなろうも知れん。決して心配さつしやるな』

源右衛門『御念の入ったおことわり。御用事あらばなんぼなりと、お使いなされて下されまし』

蓮如『では、おさらば』

源右衛門、おさき『おしずかに、おいでなされませ』

(蓮如上人は幸子坊を連れて出て行く。源右衛門、おさきは朽木の門の外まで送って出て、花道へかかる上人と訣れる。浪の音、雁の声。源右衛門、庭に立ったまま、暫らく腕組みして瞑目している。おさきもごごんで思案して居る。やがて)

源右衛門 『なあ、おさき』

おさき 『え、何え？』

源右衛門 『上人さまは、わざわざ留めにお出でなされたが、末世の時に叶かない、潮に乗った御門徒衆の、今日此頃の勢い、御同行衆のみんな、やみやみ三井寺方の言い条を、その儘まま聴いて泣寝入りとは、どうしてもわしには考えられんだ』

おさき 『わたしにも、そう思われます』

源右衛門 『すれば、誰かしらの血を見ることじゃ』

おさき 『おお、誰かしらの………』

源右衛門 『なあ、おさき』

おさき 『はい』

源右衛門 『おまえと夫婦で暮したのも三十年あまり。不仕合せなおまえでもなかったと思
うが』

おさき 『よう判っております。これも仏さまのお蔭、あなたのお蔭。あらためてお礼を
申もつします。わたしに異存はございません。どうぞ思い立った通りにして下さいませ』

源右衛門 『すれば、このわしの首をわしの思いの儘に使ってもいいというのか』

おさき 『御報恩の爲め、また人々の爲め』

源右衛門 『承知して呉れて、先ずは安心。ところでもう一つの首じや』

おさき (顔を押えて) 『おお、どうぞ、それを口に言うては下さりませ。それをこの耳に聴いたなら、わたしは息も絶え果ててしまいます。ただ黙って何事も、御宗旨の爲め、人々の爲めと、わたしに諦めさせて置いて下さりませ。然し二十を過ぎてまだ間も無い若者。そして源兵衛は、あの利発な美しいおくみ坊と兼ね兼ね深く思い合うた仲。二人をどうぞ一時なりとも晴れて夫婦にしてやうてから、お役に立てて下さりませ』 (泣く)

源右衛門 (同じく泣きながら) 『辛い娑婆しやばとは、容易たやすく口では言つては居たが、斯くまで辛いと知るは今が始めて。これにつけても期するところは弥陀の浄土。いづれ彼方で待ち合すでしょう。ぐずぐずしているうち心がにぶろうも知れぬ。では、いつとは言わずに直ぐに今から、伴せがれを連れに山科へ出かけるとしようかい』

(源右衛門行きかける。おさき留める)

おさき 『行きなさるなら門出の仕度。此の世のお礼やら、あの世のお頼みやら、仏様にお燈とうみょう明あきらなどあかあかあげて、親子夫婦が訣れのお念仏唱えさせて頂きましょう』

源右衛門 『よいところへ気が付いた』

(二人で仏壇の扉を開け、礼拝の支度)

舞台半転

(源右衛門宅の裏の浜辺。源右衛門の家の背戸は、葉の落ちた野茨のいばら、合歓木ねむのき、うつぎなどの枝木で殆んど覆われている。家の腰を覆うて枯蘆もぼうぼうと生えている。はね釣瓶つるべの尖だけが見える。舞台の中央は枯草がまだらな浜砂。潮錆び松が程よき間隔を置いて立っている。舞台奥は琵琶湖の水が漫々と湛えている。上手に浮見堂が割合に近く見えて来ている。下手の遠景に三上山がそれかと思うほど淡く影を現している。舞台下手にちよつぽり枯田の畦あぜが現れ、小さい石地藏、施餓鬼せがきの塔婆など立っている。雲はだいぶ退いて行つて、黎明前の落ちついたみずみずしい空の色。上手から源兵衛とおくみは肩をすり合うようにして出て来る。)

源兵衛 『男がおなごに家まで送つて貰うという法があるかい。ここまで来れば家へ着いたも同様。そなたの念も届いたと言うものだ。さ、今度はわしがそなたを御主家まで送つ

てやりましょう』

おくみ『送つて貰うはうれしいけれど。こなた、その戻りに衣川の宿場を通つてうっかり、夜明しの茶屋などに寄つて往くまいものでもなし——』

源兵衛『あきれた恪気りんぎおんなだ。そなたと言うれつきとした女房があるのに、何で今更の浮気。つまらぬ云い合いに手間取る暇に、その松明こつちへ貰おう』

おくみ『また、うまくわたしを騙だましなさろうとて、その手には乗りませぬ』

源兵衛『またその手に乗らんとは、わしがそなたを騙したと言うのか』
おくみ『お騙しなさんしたとも。今朝のうちから、さつきのいままで』

源兵衛『そなたが来るのを留守にしたのは、扱よんどころ所ない若衆会所の相談。それも御門徒の一大事に就つての談合と、道々も口を酸すっぱくして聞かしてやったではないか』

おくみ『それがほんとなら、大事なけれど』

源兵衛『言いがかりもいい加減にしやれ、さあ、もう夜明けも間近だ。明あけがた方までにそなたも御主家へ戻らずば首尾が悪るかろう。その松明をこつちへ渡しや』

おくみ『いえいえ。わたしや、矢つ張り、あなたを家へ送り届けて、安心して、それから往にます』

源兵衛『もう、いいからその松明』

おくみ『いえいえもう少し………』

源兵衛『出しやれ、出しやれ』

おくみ『いや。いや』

(奪い取り合ううち、松明はぱったり地に落ちる。舞台は薄闇。二人は思おもわず寄り添う。)

源右衛門の家より鉦しやうの音。(

おくみ『源兵衛さま』

源兵衛『おくみ』

おくみ『ほんにたまさか逢瀬おうせの一夜。その上なにか胸騒ぎがしてすこしでも長くあなたに

引添うて、離れとうもござりませぬ』

源兵衛『わしとても同じ想いだ。然しお上人さまがよう言われる此の世のさまは、生者必

滅えしやじようり、会者定離。たとえ表向き夫婦となつて、共白髪まで添い遂げようとしても、無常

の風に誘われるれば、たちまちあの世と此の世の距て。訣れとなるのは遅い早いの違いだ

けだ。そこをよう聴き分けて御念仏一筋を便りにおとなしく御主家へ帰つて呉れ。今分

れても首尾さえつけば、直ぐこちらから迎えに行く。若しまた拙い首尾になり果てよう

と、落ち付く先は極楽浄土。一つうてなで花嫁花婿』（涙にむせぶ）

おくみ（いそがしく手探りで源兵衛の頬を探り）『や、や、源兵衛さん、こなた泣いてい
 やしゃんすな。先程呉れたお珠数じゆずと言い、わたしのこの胸騒ぎ、またいまのお言葉。こ
 りや迂濶うかつにお傍は離れられぬ。こなた何か、わたしに隠し立てをしていなさるな』（珠
 数を取出す）

源兵衛（おくみの手を払い涙を拭いて）『は、は、は、は、何の隠し立てをしてよいもの
 か。世の譬たとえにも何ぞといえは夫婦は二世と言うではないか。離れぬ、往なぬとあまり
 そなたが云い張るゆえ今別れても末は一つの極楽浄土とわしが言つたは、ありやほんの
 口のはずみじゃ』

おくみ『いえいえ弾みではございません。それに先程から折々何ぞ思い詰めて居るらしい
 こなたのかくし溜息。さあ、言つて下され。心が急せく。それともこなたが言えずば、い
 つそのこと、こなたの家へ馳せて行き、ととさん、かかさんに理由わけを話し、のつびきさ
 せず押しかけ女房。瞬きする間もおまえのお傍は離れません。もともと二人は許いいなすけ嫁、
 誰に遠慮も要らぬ。わたしやもう、御主家へは帰りますまい』

源兵衛『こりやまた乱暴な。時節が来ぬのに押しかけ女房とは――。わしに言い損じもあ

らばあやまりもしよう。頼む。御主家へ戻って呉れ』

おくみ『わたしや、どうあつても嫌じゃわいなあ』

源兵衛『すりやこれほどに頼んでも』

おくみ『死んでもお傍を離れませぬ』

源兵衛『帰れ』

おくみ『いやじゃ、いやじゃ』

(二人、また揉み合うところに、源右衛門の家の垣の中に声あつて)

×××『二人とも争うには及ばぬ。こちへ入れ。直ぐに夫婦にしてやろう』

源兵衛『そういう声は、父者の声』

おさき『親が許して夫婦の盃、御仏前でさすほどに、おくみ坊も早う、こなたへ入るがよ

いぞや』

(裏の背戸開く)

おくみ『これはまた、どうした運やら。たとえ狐狸の仕業しわざとあつても、わたしや悦んで騙だま

されよう。のう源兵衛さま』

(源兵衛の手を取つて背戸より入る)

(夜はしらじらと明け、暁の鐘が鳴る)

第三場

(垂幕、湖水の漣さざなみに配して唐崎の松の景。朝の渚鳥が鳴いている。

源右衛門と源兵衛旅姿で花道より出で来り、程よきところにて立止まる。)

源右衛門『これ、忤、暫らくの間の故郷の見納め、この辺で一休みするとうしようかい』

源兵衛『此の期ごになって、のんきらしい………。早うこの首うって三井寺へ駆けつけさっ

しやれ』(片膝つき右の手で頸を叩く)

源右衛門(深い思入れ)『それじゃ、そなたは何もかも、承知の上での旅立ちか』

源兵衛『きのう一同会所で相談。御影像と引換えの首は、誰か一人、若衆から出さずは済

むまいと聴いたときから、若者頭がしゅの此のわたし、心で覚悟はしておりました。それに今

朝方思いがけないおくみとの盃。それを済ますと親子の旅立ち、行先を訊いてもただ遠

いところとばかり。こりやてつきり父者が自分の首とわしの首とを引換えに、三井寺か

ら開山聖人さまの御影像を、取戻す心算つもりと知った。なあ父者、永く生きても五七十年、

わし等のような素凡夫の首が、尊い御影像に換えられ、御門徒衆一統の難儀を救えるなら、願うても勤めたい親子がもうけ役。ただ気がかりなは、老先短い母御と、若嫁、女ばかりでどう暮して行くやら。おすが継り申すは弥陀の御威徳』(合掌)

源右衛門(同じく合掌)『法の為めには不ふしやくしん惜身命みよういましめの誠。やわか功德の無いことがあるうか。生き残るも、死に往くもあなた任せ。心も軽き一葉船、風のまにまに散って行くぞ』

源兵衛『もうすつかり、気が落附きました。さらば父者』

(西に向き直る。)

源右衛門『うむ、よい覚悟。わしもあとから直きに行く』

(刀を抜いて源兵衛の首を打落す。袖を千切つて首を包む。)

(幕、落ちる。)

(正面、三井寺の山門。左右へ嚴重な柵が立ち並んでいる。柵内柵外の木々の紅葉は大分散り果てたが、それでもまだ名残なごりの色を留めて居て美しい。柵の前に燃え尽きた

箒かがりが二三箇所置いてある。赤松の陰に「山門制戒」の高札も立っている。

法衣の上に頭巾、胄や腹巻をつけた法師が得物得物を執つて固めている。武装した稚児も交っている。遠くで大勢の読経の声終る。）

法師一 『何奴どいつだ、そこへ来たのは』

源右衛門（刀を提げ立たちはだかつたまま） 『本願寺浄土真宗、本寺のものだ。山科より使いに来たと、和尚さんへ取次いで下せえ』

法師二 『言葉も知らぬ下司げすなおやじ奴め。その上に刃やいばなぞ拔身さで携さげ、そもそも此処ここは何れと心得居る。智証大師伝法灌かんじょう頂ちようの道場。天下に名だたる靈域なるぞ』

源右衛門 『言葉が悪くばあやまります。何はともあれ、お預け申した開祖様御影像を、礼物持つて受取りに來ました。さつと此処を通して下せえ』

法師三 『ならんならん』

法師一 『狼藉ろうぜきいたさば、そのままには捨て置かんぞ』

法師二 『比叡の山法師の拳固の味とはまた違つた三井法師の拳固の味、その白髪頭に食つて見たいか』（拳を振り上げる）

源右衛門『事を別けて頼んでゐるのに、どうしても通さぬと言うなら、腕立ては嫌いな源右衛門だが仕方ねえ。琵琶湖の浪で鍛え上げた腕節。押しても通るが、それで承知か』

法師達『何を小癩こしやくな』

(源右衛門と法師達と睨にらみ合つて詰め寄る。朝の勤行を終え、衆僧を従えて門内を通りかかった円命阿闍梨、立出る。)

阿闍梨『これ待て、一同』

(源右衛門、法師等、そこへ蹲うすくまる。)

阿闍梨『様子のほどは、略門内より覗ほぼい知つた。源右衛門とやら、山科坊より親鸞影像を引取りに参りし由。大儀であるぞ』

源右衛門『恐れ入りましたござりまする』

阿闍梨『して、引換えの礼物ほ、確かと持参いたしたな』

源右衛門『はい。これござりまする』(袖の包みより源兵衛の首を出して前に置く。)

阿闍梨『や、や、こりや真正の生首』

源右衛門『粗末の品ではござりまするが、手塩にかけて育てた忪。首の素性は確たしかでござり

まする』

阿闍梨『よもや、それまでは得えな為すまじと思いに、まことに首を持ち来りしか。(暫時
深き思い入れ。また思い返して)然し源右衛門、約束は約束。首の数は二つであつた筈
だが』

源右衛門『あとの一つは即ちこの首。(自分の首を指して)体につけて持参しました。御
手数ながら切り取つて二つの生首、お揃え下され』

(阿闍梨始め法師一同、驚き且つ厳肅な気分にうたれ、暫らく沈黙。)

阿闍梨(嘆息)『蓮如どのは、よい信徒を持たれた。うらやましいことである。(源右衛
門をみつめて小間。)これ源右衛門とやら、親鸞の影像は直ちにそちに渡して取らす。

大事に護まもり戻つて山科坊へ安置いたせ』

源右衛門『え、え、すりや、私奴にお返し下さりますか。……でも御入用の今一つのこ
の首は』

阿闍梨(不憫の声音にて)『決して、いらぬ』

源右衛門『それは、まことでござりまするか』

阿闍梨『偽を申そうか。それ寺の衆。影像を持って来て此の者に取らせよ』

法師五六人『はい』（門内へ入る）

阿闍梨『今更言うても由ないことだが、首二つの引換え料とは、ありや此の方の切ない苦肉の親切から、出来ぬ難題を持ちかけ、今暫らく影像を、此の方に預つて置くつもりじやつた』

源右衛門『はて、親切とおつしやりますと』

阿闍梨『蓮如どのは永の流浪るろう。たとえ北国辺土は教え靡なびくとも、都近くは留守の間の荒土。然るに叡山の西塔慶純の末流も、まだ居ることなれば、たとえば山科坊建立あるとも、いづつ如何なる折を見付けて再び乱入なさんも知れず。その理由言うて聞かして親鸞影像を、なお暫らく三井寺方へ預り置かんとすれど、勢込んだる門徒衆の執心。影像堂の新築落成と共に取り戻しに来るは必定。そのゆえ無理難題を言いかけ、此方こちらで影像擁護の爲め、今暫らくそちらへの取戻しは、諦めさせ置こうとの、此の方の苦肉の親切。その方便を正直にうけ取つて命を捨つる親子の信念。斯かる例を見るからは、最早や如何なる怨魔出で来るとも、退散させて弥陀の念仏。一宗再興疑いなし。出来でかしたぞ堅田の源右衛門。この上は心よく、親鸞影像を戻し返してつかわすのみか、他宗ながら悴源兵衛の菩提も、こなたで弔とむらい追善供養。三密瑜伽ゆがの加持力にて、安養成仏諸共に、即身成仏兼ね得させ

ん。心を安めよ仏子源右衛門』

源右衛門（額ぬかずきつつ）『老おいさき先短いこの年寄が、悴に代って生き永らえ、悲しいやら面目ないやら、心苦しゅうござりまするが、御門徒宗が他宗の智識に、これほどまでに褒ほめられる手柄をしたと思えば、どうやら心が慰められます。お察しなされて下さりませ』

（法師五六人、親鸞聖人の木像を担おぼぎ出して来る）

阿闍梨『親鸞どのもいたわしゆう思おぼしめ召されていらるるだろう。それ、各僧、源右衛門の

背に負おわしてやられよ』

法師一同『畏かしこまりました』

（此の時おくみは跣はだし足で先に、蓮如上人は駕かごに乗り、取るものも取りあえぬ形で花道を駈かけつけて来る）

おくみ（源右衛門に取りついて）『もうし、ととさん、こちの人はどうしやさんした』

（源右衛門、親鸞聖人の木像を背負いつつ、顔をそむけて、うつ向く。）

おくみ『黙もくつていなさるは心がかかり。早う教えて下さりませ』

源右衛門『これ嫁女、源兵衛はな』

おくみ『源兵衛さんは？』

源右衛門『それ、そこじゃ』（顎にて袖の千切れに包まれし首を示し、涙をはらはらと落す。）

おくみ（袖の首を取上げて）『やつぱり覚悟の通りにならしゃんしたか。ととさんと一緒に旅立ちの様子がおかしいと、直ぐそのあとでかかさんを攻め詰つて漸なほよう訊いた事の仔細。それから山科の御坊に駈けつけて、お上人さまにお訴え申し、お上人さまともども急いで駈けつけたが』（泣く）

蓮如（駕籠かごより降り）『時遅れしか、残念、残念』

源右衛門『嫁女、歎くまいぞ。そなたが抱いておるは、そりや源兵衛の抜け殻。魂は移つて、これ、此処こゝに在おわします』（顎にて背中の影像を示す）

おくみ（袖の首を抱えたまま、影像に取りついて）『身を捨てても、人を救うとは仏のお誓い。その誓いの通りなさんした、源兵衛さんは、凡夫でいなながら聖ひじりも同然。見れば開山聖人さまの御影像も泣いていやしやります。源兵衛さんは本望であらうわいなあ。わたしやもう、歎きも、哀しみもいたしますまい。（首にもものううてな）如く）期するところは極楽浄土。一つ台うてなで花嫁花婿。のう、こちの人、忘れまいぞえあのことを。いや、忘れられぬぞあのことを。忘れられぬぞあのことを』（唱えつつ首の包みに額を押し

あて泣きむせぶ。舞台一同のものも落涙)

蓮如『時は末法、機は浅劣。聖道永く閉じ果てて、救いの術はただ信心。他力易行と教え
て来たが、思いに勝まさる事実の応驗。愛慾泥裏の誑きやう惑わくの男と女がそのままに、登る
仏果の安養浄土、恐ろしき法力ではあるなあ。この上は源兵衛に続いてわが身も一しお、
老いの山坂厭いといなく、衆生しゆじやう済さい度どに馳せ向わん。有難し、忝かたじけなし、源右衛門。源兵衛。
(合掌しつつ和歌を口ずさむ)

あひがたき教へを受けて渴かつ仰がうの、

かうべはこゝに残りこそすれ』

(衆僧經の諷誦ふうじゆの声にて、舞台一同合掌礼拝。)

—幕—

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成6）年2月24日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第一巻」冬樹社

1974（昭和49）年9月15日初版第1刷

初出：「大法輪」

1934（昭和9）年11月号

入力：門田裕志

校正：オサムラヒロ

2008年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

取返し物語

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>